研究概要報告書【音楽振興部門】

研究題目	昭和初期における管打楽器の基礎練習に関する教材史研究 —「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の比較検討を通して—	報告書作成者	飯村　諭吉
研究従事者	飯村　諭吉		
研究目的	昭和初期における合資会社日本管楽器製造所の管打楽器の製作販売によって、全国各地の学校や職場にアマチュアバンドが誕生したことが最近報告された。筆者は、これまで同時期の小太鼓の練習法を調査し、新交響楽団(現、NHK 交響楽団)のティンパニストの小森宗太郎の教則本では、初学者にも理解し易いように、「小太鼓の構え方」から「ルーマン」に至るまで段階的に説明していることを日本音楽表現学会『音楽表現学』第 15 巻(2017)で報告した。また、練習内容に関しては、旧来の小太鼓の教則本には見られなかった演奏上の留意点として、撥を振る動作と同時に足踏みを開始することを提示し、実際の歩行運動への応用を読者に促していることが確認された。 そこで本研究では、これまでの研究成果を土台として、昭和初期における管打楽器の基礎練習に関して「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」を比較検討しながら明らかにし、今日の管打楽器指導に対する教材史的示唆を得ることを目的としている。ここでは、当時発行された教材(教科書・教則本)の解読を通じて、当時のアマチュアバンドはどのような練習法を基礎段階に導入したのか、また何を「基礎練習」として提示していたのかを比較しながら調査を行う。なお、本研究で取り上げる「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の楽器編成は、次の通りである。 **① 吹奏楽** コルネット(B♭)、トランペット(B♭)、トロンボーン(C)、バリトン(B♭)、バスチューバ(C)、ビューグル(B♭)、ホルン(E♭)、オーボエ(C)、クラリネット(E♭)、アルトサクソフォン(E♭)、テナーサクソフォン(B♭)、バリトンサクソフォン(E♭)、フルート(C)、ファゴット(C)、小太鼓、大太鼓、シンバル(参考文献:山口常光『ブラスバンド教本(改訂再版)』、1938 年、管楽研究会、p.73.) **② 喇叭鼓隊** 小喇叭、中喇叭、大喇叭、小太鼓、大太鼓、シンバル(参考文献:陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』、1928 年、共益商社書店、p.39.) **③ 鼓笛隊** 横笛(C)、小太鼓、中太鼓(参考文献:江木理一・小森宗太郎:『鼓笛隊指導書並教則本』、1938 年、共益商社書店、p.2.)		

研究内容	本研究では、上記の目的を検証するため、以下の具体的課題を設定し作業を進める。 **① 昭和初期のアマチュアバンドで使用された教材と練習内容を把握する。** 昭和初期の吹奏楽界に普及され始めた「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」に着目し、アマチュアバンドで使用された教材と練習内容を把握する。ここでは、管楽研究会(合資会社日本管楽器製造所の出版部門)の機関紙『ブラスバンド』(1933-1937)、『ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』(1935-1937 年)及び、学校現場・陸軍戸山学校関係者の書籍の分析を通じて、各教材の「著者」「発行年」「主題」「発行所」を確認する。その後、管楽器は「音程練習」「音階練習」「スタッカート」「ダブルタンギング」、打楽器の場合は「一つ打ち」「二つ打ち」「フラ打ち」「ルーマン」等の練習内容を一覧表にしてまとめる。また、本研究期間内においては、国立音楽大学附属図書館、東京音楽大学付属図書館、東京藝術大学附属図書館、東京文化会館音楽資料室、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館にて閲覧収集を行う。なお、山口常光の生涯に関わる基礎的事実は日本音楽表現学会『音楽表現学』第 16 巻(2018)※1 で報告した。それに加え、管楽研究会の設立と『ブラスバンド』の発行、山口常光、小森宗太郎の役割については音楽教育史学会『音楽教育史研究』第 21 号(2019)※2 に発表した。 ※1 飯村諭吉「山口常光『吹奏楽編曲法』(1935)が生まれた背景:ガブリエル・パレス『吹奏楽法』(1898)の引用をめぐって」『音楽表現学』第 16 巻、日本音楽表現学会、2018 年、pp.31-42. ※2 飯村諭吉「管楽研究会『ブラスバンド』(1933-1937 年)にみる管打楽器指導と学校教育実践」『音楽教育史研究』第 21 号、音楽教育史学会、2019 年、pp.1-12. **② 「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の基礎練習を比較する。** 課題①を踏まえて、管打楽器の基礎練習の特徴を「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の視点から明らかにする。具体的には、廣岡九一『スライドトロンボーン教則本』(1933)、山口常光『ブラスバンド合奏練習書』(1936)、陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』(1928)、江木理一・小森宗太郎『鼓笛隊指導書並教則本』(1938)掲載の基礎練習を比較する。その際、複数の教材で取り上げられた譜例を抽出し、フォルテやクレッシェンド等の演奏記号を視野に入れながら、これらの共通点を整理する。ここでは、「音程練習」や「一つ打ち」等の基礎練習はどのような方法論を採用したのか、初学者の演奏技術の習得を促すためにどのような工夫がなされているかについても考察を進める。 **③ 課題①～②の教材史上の位置付けを明らかにする。** 課題①・②を踏まえて、昭和初期のアマチュアバンドにおける管打楽器の教材の位置付けを明らかにする。これらの研究から得られた知見をもとに、今日の管打楽器指導の参考となる基礎練習の実践例を提示し、その実施上の留意点について検討を行う。

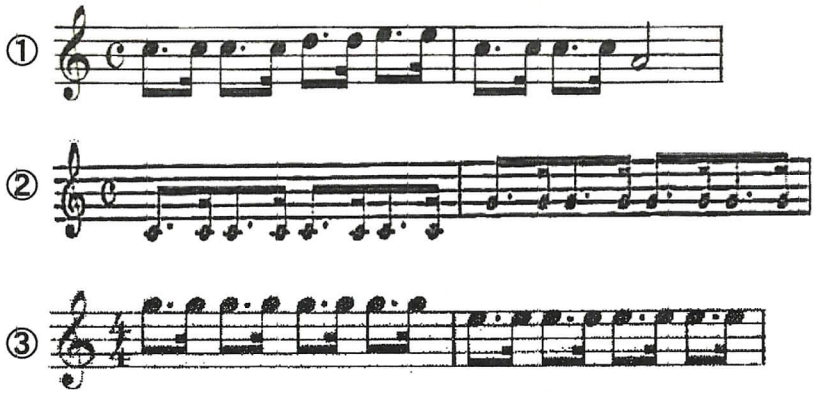
研究概要報告書【音楽振興部門】

研究のポイント	本研究では、昭和初期における管打楽器の基礎練習を対象とするため、従来注目されていなかった各楽器の譜例から練習内容に関する新たな知見を得ることが予測される。さらに、当時のアマチュアバンドの合奏形態の「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」に着目して検討を行うことは、戦後日本の「吹奏楽」部(団)「金管バンド」「鼓笛バンド」の基礎練習の起源を解明する上での有用な手がかりとなると考えている。 本研究の成果から、昭和初期における管打楽器の基礎練習の演奏法が明らかになれば、先人の知識・発想を取り入れた教材の開発につながる。今日の音楽界には、管打楽器の学習者・指導者に教材史の視点を取り入れた練習内容を提案することが可能となる。
研究結果	① 昭和初期の「吹奏楽」で使用された教材は、東京府立第一商業学校(現、東京都立第一商業高等学校)吹奏楽団の指導者の廣岡九一、陸軍戸山学校出身の山口常光、松下哲、小森宗太郎、東京喇叭組合専務理事兼検査長を務めた三戸知章らの手によって生み出されている(表1)。それに続き、「喇叭鼓隊」に関する教材は、陸軍戸山学校、日本教育音楽協会、管楽研究会によって発行されている。さらに、「鼓笛隊」に関する教材は、江木理一・小森宗太郎との共著『鼓笛隊指導書並教則本』(1938)の一冊であるとことが示された。 ② 結果①を踏まえ、「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」における基礎練習を整理すると、管楽器は「音程練習」「付点音符」、打楽器は「一つ打ち」「ルーマン」等が複数の教材で取り上げられていることが明らかになった。このうち、「付点音符」の個人練習は、4分の4拍子で「付点八分音符」と「十六分音符」を組み合わせたパターンが大半を占めていた(譜例1)。ここでは、1～2拍、または1小節毎に音の方向を変化させた演奏例が多く見られた。また、山口案の合奏練習は、上記のパターンとアクセントが付いた四分音符による練習法が示された(譜例2)。 次に、小太鼓の「一つ打ち」は、撥の先端を弾ませるアップ・ストロークを採用し、四分音符を「右」「左」の手順で打つ練習法を紹介したという点で共通している(譜例3)。また、これらの相違点は、廣岡案の「一」「二」「三」「四」と拍子を数えながら撥を振り下ろす方法、日本教育音楽協会案の1小節目から段々と速度を早める方法、小森案の撥を振る動作と同時に「左足」「右足」の歩行動作を開始する方法が確認された。 ③ 本研究で取り上げた教材は、昭和初期における管打楽器の基礎練習に関する教材史研究を追求する上で、重要な史料であると位置づけられる。例えば、音の方向を変化させた「付点音符」の練習や、歩行動作が伴う「一つ打ち」の練習は今日における管打楽器指導の一助として役立てられる。また、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団『サウンド』第34号で紹介した『陸軍喇叭符』を利用した練習例は、音の跳躍と細やかなリズムによってタンギングが学べるように工夫され、その技術の習得を促すことができると考えられる(譜例4)。
今後の課題	今後は、昭和初期における吹奏楽界において、上記に示した「付点音符」「一つ打ち」といった基礎練習は同時代のアマチュアバンド実践にどのように浸透しているかを把握することが課題である。さらには、1940年代後半以降に廣岡、小森らによって発行された「吹奏楽」「鼓笛バンド」等の教材を分析し、戦前の基礎練習から何を継続して紹介し、どのような点を変更したのかを明らかにしたいと考えている。

表１．昭和初期のアマチュアバンドの教材と練習内容より一部

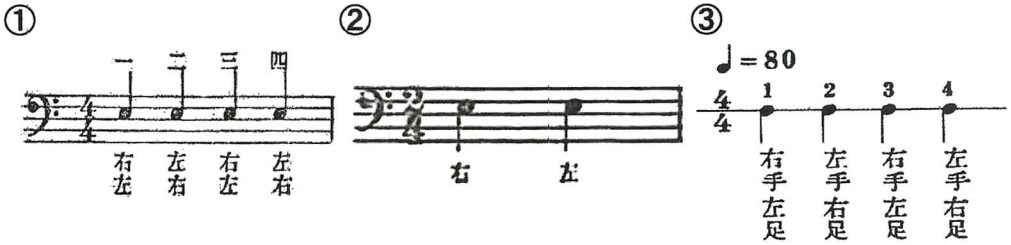
著者名	発行年	主題	発行所	練習内容	分類
廣岡九一	1933	スライドトロンボーン教則本	共益商社書店	第一～七ポジション、音階練習(ハ・ロ・変ロ、ト長調)、スタッカート、付点音符、ダブルタンギング	吹奏楽
	1934	トランペット・コルネット教則本	共益商社書店	全音符、各音符の練習(二～八度)、スタッカート、スラー、付点音符、三連符、ダブルタンギング	
	1934	クラリネット教則本	共益商社書店	全音符、音程練習　音階練習(ヘ・ト・変ロ長調)、付点音符、三連符、スタッカート、スラー、レガート	
	1935	バスチューバ教則本	共益商社書店	全音符、音程練習(三～五度)、スラー、スタッカート、タイ、音階練習(ヘ・ト長調)、付点音符	
	1935	バリトン教則本	共益商社書店	全音符、音程練習(二～八度)、スタッカート、タイ、スラー、三連符、ダブルタンギング	
	1937	ピッコロ教則本	共益商社書店	全音符、音階練習(ハ・ト・ニ・変ロ・変ホ・変イ長調)、スラー、ダブルタンギング、付点音符	
	1940	小太鼓教則本	共益商社書店	一・二・五・七・九つ打ち、ルーマン、フラ打ち、三・六・八・十・十一・十三打ち	
山口常光※1	1935	クラリネット教本	シンフォニー楽譜	全音符、ダブルタンギング、音階練習(ト・変ロ・ニ・変ホ・イ長調)、トリル	
	1936	ブラスバンド合奏練習書	管楽研究会	三連符、シンコペーション、長音階、短音階、スタッカート、付点音符、レガート	
	1937	独習コルネット・トロンペット教則本	管楽研究会	tu の発音練習、三連符、シンコペーション、長音階、短音階、スタッカート、付点音符	
	1937	独習打楽器教則本	管楽研究会	一つ打ち、ルーマン、フラ打ち、タップ、三・四・五・六・七・八・九つ打ち(小太鼓)	
	1938	独習ピストン・トロンボン教則本	管楽研究会	tu の発音練習、三連符、シンコペーション、長音階、短音階、スタッカート、付点音符	
	1938	独習アルト教則本	管楽研究会	tu の発音練習、三連符、シンコペーション、長音階、短音階、スタッカート、付点音符	
松下哲	1938	オーボエ教則本	共益商社書店	三連符、スラー、音階(ト・ヘ・ニ・変ロ長調)、付点八分音符、トリル、装飾音、六連符	
三戸知章	1938	バリトン教本	田邊吹奏楽器	低い・高い音の練習、レガート、音階、スタッカート、半音階、シンコペーション、リズム練習	
	1941	小バス教本	田邊吹奏楽器	高い音の練習、各音符の練習、レガート、スタッカート、シンコペーション、トリル、タンギング	
陸軍戸山学校	1928	喇叭鼓隊教科書	共益商社書店	発音練習、付点音符、舌の運動(八分・十六分音符、三連符)、ダブルタンギング(喇叭類)、一・二・三・四・五・九つ打ち、十三打ち、フラ打ち、ルーマン(小太鼓)	喇叭鼓隊
日本教育音楽協会(編)	1936	喇叭鼓隊教本	音楽教育書出版協会	全音符、二・四・八・十六分、付点二・四・八分音符の練習、三連符、シンコペーション(喇叭類)、一・二・三・四・五・七・九・十一・十三打ち、フラ打ち、二・三つの飾り打ち(小太鼓)	
管楽研究会(編)	1941	軍隊喇叭、喇叭鼓隊教本	管楽研究会	各音符の練習、全音符・二・四・八・十六分音符の練習、付点音符の練習(喇叭類)、一・二・三・五・九・十三打ち、ルーマン、フラ打ち(小太鼓)	
小森宗太郎	1933 (1937)	打楽器教則本 (打楽器教則本訂正増補再版)	共益商社書店	一・二つ打ち、ルーマン、フラ打ち、三・四・五・六・七・八・九・十・十一のラ打ち、パタフラ、パタタフラ、パタフラフラ、ラテソーテ、リゴードン、ディアンヌ、クーレ、クーレソテ(小太鼓)	吹奏楽、喇叭鼓隊
江木理一・小森宗太郎	1938	鼓笛隊指導書並教則本	共益商社書店	各音符の練習(全音符、二・四・八分音符)、舌の切り方(タンギング)の練習(横笛)、一・二つ打ち、付点リズム練習、三・四拍子の練習、フラ打ち、ルーマン(小太鼓)	鼓笛隊

※1　山口常光のアマチュアバンドの教材は、上記の他に、共益商社書店から発行された『独習スライド・トロンボン教則本』(1938)、『独習バリトン教則本』(1938)等がある。



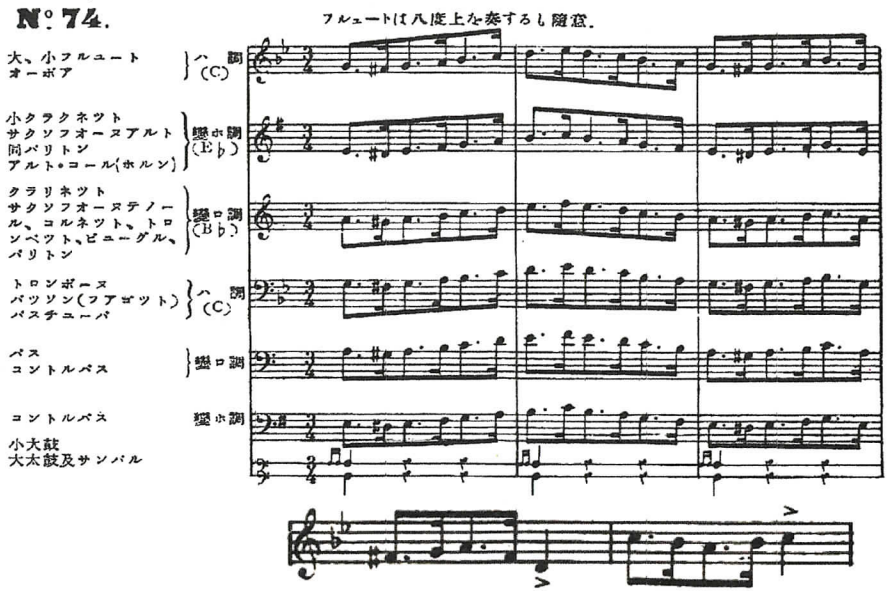
譜例１．付点八分音符の個人練習

〈出典〉①松下哲『オーボエ教則本』、1938 年、共益商社書店、p.33.
②陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』、1928 年、共益商社書店、p.11.
③江木理一・小森宗太郎『鼓笛隊指導書並教則本』、1938 年、共益商社書店、p.22.



譜例３．一つ打ちの練習法

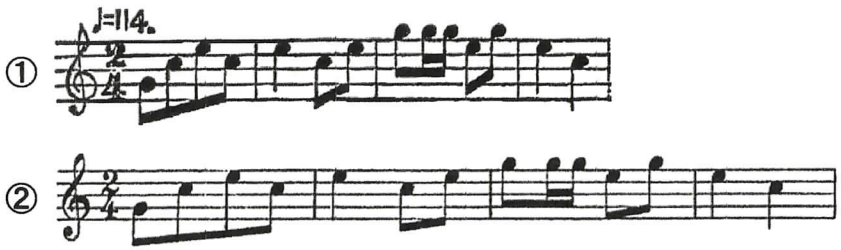
〈出典〉①廣岡九一『小太鼓教則本』、1940 年、共益商社書店、p.14.
②日本教育音楽協会編『喇叭鼓隊教本』、1936 年、音楽教育書出版協会、p.19.
③江木理一・小森宗太郎『鼓笛隊指導書並教則本』、1938 年、共益商社書店、p.26.



上：1～3 小節、下：4～5 小節（フルート、オーボエ）

譜例２．付点八分音符の合奏練習

〈出典〉山口常光『ブラスバンド合奏練習書』、1936 年、管楽研究会、p.57.



譜例４．『陸軍喇叭符』を利用した練習例

〈出典〉①永井建子・山本銃三郎『喇叭複音新譜：附・陸軍喇叭譜』、1908 年、宮本武林堂、p.59.
②江木理一・小森宗太郎『鼓笛隊指導書並教則本』、1938 年、共益商社書店、p.21.